

---

セルフ・ライト・イデオロギー

魔人転生記

葵 大和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セルフ・ライト・イデオロギー

魔人転生記

### 【Nコード】

N2571Z

### 【作者名】

葵 大和

### 【あらすじ】

始まりは唐突に。何の脈絡もなく導かれた異世界で、青年は連続死亡記録を大幅に更新した。剣で斬りつけられ、光線で打ち抜かれ、拳に貫かれ。ようやく理不尽な死を免れた彼を拾い上げたのは魔人族と畏怖される種族の女性で

異世界転生モノです。割と勢いで書いているので都合主義万歳要素を含む事があります。時間潰しにでもお使いください。

## 1話 「輪廻」

突然だけど、死亡フラグってあるだろ？

代表的な物を上げると、「ここは俺に任せて先に行け！ 後で必ず追いつく！」とか、「俺、この戦が終わったら結婚するんだ……」とかの事だよ。他にも色々類型はあるだろうけど、得てして似たような台詞だよな。

でもさ、俺思うんだ。

一番可哀想なのって死亡フラグすら立てられないまま突如として死ぬ奴だよな。

いつものようにベッドに入り、明日も楽しい日になるといいなあ、なんて楽観的な考えを巡らせながら目を閉じた所まではなんとなく覚えていたんだ

次に目が覚めたら鬼のような形相をした鎧甲冑の男に斬り掛かられてました。

「この世から消えてなくなれ！ バケモノめ！」

凄まじい気迫です。でも正直訳が解らないのであんまり怖くありません。とても不思議です。眼の前の鎧甲冑のお方の剣がもう肩にめり込んでいてそろそろ心臓まで達しそうです。他人事みたいに「ああ、俺ここで死ぬんだな」とか考えながら、どうせなら盛大に果ててやるうなどという意味不明な衝動が湧きおこってきたのでとり



りやあ痛いです。たぶん腹部を突き抜けてます。まだ前の二つは良かった：一度目は心臓両断で即死、二度目は訳も解らないまま光に覆われて即死、でもこの三度目は頂けない。かなり痛い。

徐々に痛みが消えてきて妙に頭が澄んできました。いい加減腹が立つてきた。立つ腹がすっぽり拳大に抜け落ちてるんですけどね、現状。嗚呼、勝手に瞼が下りてきたよ。

次目覚めた時にはまた死ぬ一歩手前なのだろうか。

目が覚めました。正直何回目かも解りません。いちいち死ぬ様子を説明するのも無駄に思えてきた。

「嫌だあああああああああ！！」

とりあえず叫びました。もう半ばやけくそです。これまでに一体何回死んだと思ってるんだ。

「！！」

しかし、どうやら今回は様子が違ったようです。

え？ もう死ななくてもいいの？

ひとえにその事だけが嬉しくて、現状を何も理解出来ぬまま、溢れ出る感動に身を任せた。

「うっ、うぐっ、うえっ」

我ながら、無様な泣き姿だと思う。きつと顔は泪と鼻水でぐちゃぐちゃになっているのだろう。

「?」

ひとしきり泣いた後、自分が置かれている状況を確認しようと首をもたげた。なんかすっごい動きづらいけど今は気にしないでおう。

ふと視線を周りに巡らせると、人の顔が映った。

「、……」

異様に血色の悪い青白い肌と、不気味な赤の瞳をした何者かが、口を開いて、何か言葉を紡いでいる。漠然と何か喋っているとだけ解る。男とも女とも見分けのつかない中性的な顔。青白い肌と真っ黒で艶やかな髪が強いコントラストを発している。

とりあえず『彼』と代名する事にした。

全く聞きとれないが、とりあえずこちらから何かアクションを起こしてみよう。そう思って再び俺は口を開いた。

「あつあつあー?」

……ん?

落ち着け、もう一度だ。

「あぶ? あつあー?」

……。

そこから自分の置かれた状況を知るのは早かった。なんともなく嫌な予感がして、咄嗟に腕を振り上げて自分の顔の前に持つてくる。腕が重い。

そして、自分の手を見て理解してしまった。

その手は赤子のように小さく、弱弱しかった。握れば潰れてしま  
いそうな小さな手。

意志の命令とズレた反応を示す声帯、口。

「？」

傍らでこちらを見ながら言葉を紡ぎ続けている何者かが、心配そ  
うな顔でこちらを見て来た。

「オギヤア」

気持ち悪い言葉が出ました。くそっ、気合いが足りないのか！  
ならばやってやる！ やってやるぞ！

「オウギヤア？」

もうしません。もっと気持ち悪くなったよ！

もう喋るものか。さっきは喋れたのに…… 最初の叫びは一度き  
りの奇跡だったのか…… どうせならもっと有意義に使うべきだっ  
た！ 今更遅いよね！

必死で心の中で明るく声を奮わせるが、しばしおいて、何とも言  
えない虚無感に襲われた。

赤子、そう、赤子。俺の軀は赤子そのものだった。

そんなことを考えていると、ふいに体を浮遊感が襲ってきた。視  
界が揺れる。

さっきまで傍らでこちらを見ていた何者かが、俺を抱き上げてい  
た。

どこに連れて行かれるのだろうか。

でも、とりあえずは

死ななくて良いなら今はなんでもいいや。

一周して楽観的になる。この時ばかりは自分の精神力を称えてやりたくなった。

時間がたつごとに俺の理性は落ち着きを取り戻していく。

考える、思考する、といった力が失われていない。赤子の軀と熟練された精神の差異に戸惑うが、かくあるモノなのだからとやかか言っても仕方あるまい。深く考えて無限思考のどツボにはまるよりは幾分マシだろう。解らないものは解らない。開き直れ、俺。

血色の悪い彼の腕に揺られて数十分。目に入る景色は鬱蒼とした木々ばかり。暗い。じめじめしてる。

それからさらに数十分して、ようやく視界に真新しい景色が入ってきた。

荘厳な城である。ちょっと心が高鳴った。

「  
「

彼が何か言ってくる。ごめんね…… 全く何言ってるか解らないよ……

でも、その親切心だけでもありがたい。親切心というより乳母心みたいな感じ？ これまでひたすらに罵倒されては殺されて、悪意をぶつけられては殺されて。そんな輪廻を巡ってきたから、もはやこの人の心配そうな表情だけで満腹です。

そんな事を考えていると、今度は抗う事すら躊躇われるレベルの



眠気に襲われた。微妙に揺られるのも相まって、わずか数秒で瞼が落ちる。

正直な所、睡眠というものが恐ろしかった。自分の躯が赤子であることを知っているから、睡眠が必要なのだろうと納得はできるが、何分ほんの少し前までは意識が途切れては目覚め、殺され、目覚め、殺されの繰り返しだったのだ。今意識を途切れさせてしまえば、次に目覚めた時にはまた理不尽な死と直面しているのではないか。

ああ、でも無理、これには逆らえない。生理現象万歳。

最後の足掻きと腹を括って、意識の途切れる間際、口には出さず、心の中で呟いた。

もうどうにでもなれ

次に目が覚めた時、真っ先に周囲を確認した。

結論から言えば、俺は巨大なベッドに寝かされていた。分相応にも程がある。でかすぎだろおい……

すると、視界の端から、ぬっ、と眠りに落ちる前に見ていた『彼』が姿を現した。

片手には分厚い本。俺が起きたことを確認すると、ぱらぱらとそれをめくり始めた。

「ア……ナタ……は、だ……れですか？」

なんと！ 知ってる言葉だ！ あの分厚い本は翻訳書か何かかな？ ……でもね、それを訊ねたところで俺に言葉を返す能力はないんだよ？ ちょっと頭の緩い人なのかな？ 馬鹿、やめる俺、せっかく必死で話しかけてくれたんだぞ。

自分を戒める。とはいえ、言葉を返せないというのは紛れもない

事実で、どうしようかと考えていると、再び彼が言葉を紡いだ。

「……ごめ……んなさ……い。すこし……で……ことば……わかる、くる」

彼がしかめっ面で必死に手元の本に目を走らせ、再び声を発した。片言だが、恐らく俺が理解出来る言語を使える誰かが来てくれるのだろうかとは理解できた。運が向いてきた。これで一方通行的にはあるが情報を得られる。

嬉しくなつて身体に力を入れて動きまわってみた。

彼は俺がベッドの上を高速で駆けまわる様を見て、嬉しそうに微笑んだ。中性的な美貌に優しい微笑。血色の悪い真っ白な肌も一片の汚れのないキャンパスのように見えて、つい見惚れてしまう。

とにかく、彼の言う人物を待つことにしよう。それまでにある程度身体を制御できるように努めて、言葉ではなく動きで反応を示せるように練習しよう。うん、それがいい。

彼のいう人物はそれからほどなくして俺の視界に現れた。彼と同じような異様に真っ白な肌と、真っ赤な眼。その人物は一見して男だと解った。隆起する筋肉群がことさらに男であることを主張してくる。

「初めまして。気分はどうだい？」

言葉づかいは丁寧だった。

俺はその短い言葉を受けて、ベッドの上で右に一回転した。フフ、これがこの短時間で俺が得た能力の一つ。右に一回転で肯定！左に一回転で否定！ 完璧！ ……なわけねえだろおおおお！

これくらいしか思いつかなかったんだよおお！ 頼む！ なんとかこつちの意志を汲み取ってくれ！ 利発そうなお兄さん！

「うん？ ああ、君は喋れないのか。どうも赤子と関わり慣れていないから失念してしまっただよ」

もう一回右に一回転。

「右に回転すると肯定……かな？」

マジパネエ。このお兄さんマジパネエ。天才と称しても良い。察しが良いとかそういう次元を軽く二秒で超えてった。

よし、ここで右にもう一回転すれば完ぺきだ。

「はは、やっぱりそうか。解ったよ。それにしても、意志は明確なのに喋れないっていうのはもどかしいね。赤子ってみんなそうなのかな？」

いやいや、それは無いと思うよ……

「まずは自己紹介から。僕の名前は《アルフレッド・サターナ》。そして君を拾ってきた『彼女』は《リリアン・サターナ》」

彼女？ 女だったのか。彼と呼んでいたことを心の中で詫びておこう。

「彼女の話だと、君は僕達の国の領地に落ちていたらしい。

「？」

「。。」

アルフレッドは別の言語でリリアンと喋った。  
それにしても、落ちていたとはどういう見なのか。  
あともう一つ、名前で気付いた。

俺は俺の名前が解らない。

あつたような気もする。何度も何度も殺される段階で、記憶が壊れてしまったのか。

「それで、放っておくのも忍びないからリリアンが連れて来たらしい」

名前、なんだっけなあ。

だめだ、絶対に思い出せない気がする。忘れていたか、思い出せないだけって感じじゃない。  
無い。

「辛そうだけど大丈夫？ 安心して。僕達は君を捨てたりしないから。連れて来たからには君が成長するのを助けよう」

ありがたい。人の良心つてのに徐々に触れた気がする。

「さしあたって、とりあえずは君が僕達と十分に話せるよう、僕が言葉を教えよう。食べ物も与える。さあ、疲れただろう。君は安心して眠るといいよ」

アルフレッドが柔らかな微笑みを見せた。

その微笑みに釣られるように、俺は一度だけ顔をしわくちやにしながら笑って。再び瞼を閉じた。

いつかのベッドの中で呟いていたように、それでも、今度ばかり

は心から

明日は楽しい日になっていたらいいなあ

## 2話 「魔眼」

リリアンに拾い上げられてから一週間が過ぎました。

怒涛の一週間だった…… 唯一俺が理解出来る言語を話せるアルフレッドはなにやら忙しいようで、忙しい中度々俺が寝ているベッドへ顔を出してはくれるが、大体はリリアンが俺の世話をしてくれていた。

怒涛の一週間だったと感じるのはそのリリアンのせいでもある。

「……………」

「うっ……………うえ……………えぐっ……………」

俺は今、猛烈に悲しんでいる。溢れ出る感情をせき止める事が出来ず、本気で涙している。何故かって？

「……………」

リリアンが両手に血の滴る新鮮な『生肉』を持って、俺に差し出してくるからだ。おい！ やめろ！ そんなん食えるか！ 助けてアルフレッドお兄さん！

ぬるっとした感触が口元を覆う。一向にその赤い物体を喰わない俺に対し、リリアンは無理やり喰わせようという魂胆らしい。心配してくれるのは嬉しいけどさすがにそれは食えないよ……

「……………」

その美貌で可愛らしく首を傾げて見せても俺は喰わないからな。

消化に悪いだろ。ていうか一通り火を通して殺菌とかしてくれ。俺赤子だよ？ 脆弱さ半端ないよ？ やっぱりリリアンってオツ

ムが緩い方なのかな……

ようやく生肉を喰わせる事を諦めてくれたようで、リアンはいそいそとベッドの横の椅子に座り込み、自分でその生肉を食い始めた。目元に雫が浮かんでいるように見えるが気のせいか。ちよつと泣きながら生肉類張るとか絵的にシユールだから。

彼女はあまり感情を表に出さない女性だった。もちろん、心配しているように見えたり、軽く微笑を浮かべたりはするけど、その変化量はアルフレッドに比べるとごく微細。一週間毎日彼女の顔を近くで見えていたから解るけど、これは一般的には鉄面皮と称される類だろう。

生肉を類張るリアンから視線を外し、見慣れた天井を凝視するよう努める。

すると、そこで部屋の扉ががちゃりと開いた。

来たか！ 我が救世主！

「ははは、またリアンは生肉を食べさせようとしていたのか」

笑い事じゃないですよ、アルフレッド兄さん。

「ちゃんと赤子でも食べられそうなものを持ってきたよ」

そういつてアルフレッド兄さんは手の中からいくつかの小さな木の実を取りだして見せてくれた。木の実とはいったけど、どうにもその姿は毒々しい。紫とか黒とか……

「大丈夫。ちゃんと毒は抜いてあるから」

毒？ 毒って言いました？ それ毒が入ってたってことですよね？ ……いやあ、今あんまりお腹減ってないんですよ。それはあ

とで食べます。後で。うん。

俺はいつも以上に必死になって左に三回転した。鬼気迫る勢いで否定の意を送る。

「そう？　じゃあ、あとでリリアンに渡しておくよ」

やめろおおおお！　それは死亡フラグだあああ！　無理やり喰わせられるに違いない。いや、確実に喰わせられる。はは、予言者になった気分だぜ。

なんて心の中で恰好よくポーズを決めていると、アルフレッド兄さんが続けて言葉を紡いだ。

「今日は僕達の家族を紹介しておこうと思ってね。きっと君の役に立つ」

家族？

ふいの言葉に疑問符を浮かべるが、すぐにアルフレッドの言葉が形となって目の前に現れた。

部屋の外からがやがやと騒がしい複数の声が聞こえてくる。そして

「！」

「！」

「？」

うわあ……　なんかいつぱい部屋に入ってきた。皆が皆、アルフレッドやリリアンと同じような肌の色をしていて、赤い瞳をしている。

「騒がしくて悪いね。でも、皆君みたいな赤子が珍しくて一目見よ



うと集まってきたんだ」

そういえば、前から引つかかる単語がある。  
珍しい。正確には赤子が珍しい。

「実は僕達、赤子つてほとんど見た事がないんだ。僕達の種族は繁殖力が凄く弱いから。滅多に赤子が生まれない。その代わり、すごく長命だけだね」

よしよし。知らない言葉の羅列がたくさんだぜ。

……んえ？

「だから、普通なら僕達と同じ容姿の赤子がいれば誰の子だか必死で調べるんだけど、どうにも君は僕達の誰かから生まれた訳じゃないらしい。皆知らないって」

いやいや、待て待て待て。同じ容姿？

「君は種族的に見れば、僕達『イノ・サターナ魔人族』と瓜二つだ。性質的にもよく似通っている。でも、君がどこから来たのかはわからない」

アルフレッドが苦笑した。

俺は今すぐに鏡を貸して貰いたい気分になった。そういえば、自分がどんな姿をしているか気にした事がなかったな。

「でもね、僕達と同じ種族なら、たとえ知らない赤子でも僕達の家族だ。誰から生まれたかはこの際たいした問題じゃない。他の家族達も、早く君と話したいって言ってるよ」

アルフレッドの横から十数人の魔人族(?)の方が興味しんしん

といった体でこちらを見てくる。

俺は若干面喰らったが、アルフレッドのいうことも尤もだと思っ  
て言語習得に意欲を燃やした。

その後、アルフレッドが他の魔人族を帰し、俺が寝ているベッド  
の隣に椅子を持ってきて座りこんだ。

「難しい話は君がもう少し大きくなってから話すよ。それまでは僕  
達が守ってあげるから、安心して育ってね」

さすがアルフレッド兄さん、慈愛に満ちた表情でそう言われると  
虜にされそうだ。

そうまで言ってくれるなら、俺も安心して育って見せよう。フハ  
ハ、まずは睡眠からだ！ あっ、でも生肉は勘弁してね……

一カ月が過ぎました。意外と月日が流れるのって遅い気がする。  
寝ては起きて飯食ってまた寝て。時々生肉押し付けられては拒み  
リリアンの顔も随分と見慣れて来た頃、ついに俺は自分の力で歩く  
事ができるようになっていた。

自分でもこんな速度で育つとは思わなかった。四足歩行から二足  
歩行へ三日で移行した時は自分の天才っぷりに心底慄いた程だ。

あと言葉の方も、アルフレッドの超翻訳機能のおかげもあって、  
大体マスターした。第一、アルフレッド以外の魔人族は皆リリアン  
と同じ言葉で話していたし、俺も多大な好奇心を抱いて彼らの言葉  
を聞いていたので吸収は早かった。

時折足取りがおぼつかなくなる事はあれど、今やこのやけに荘厳  
な城の中を自由に歩けるだけの技量はある。

「《サレ》、肉食べる？」  
「全力で遠慮します……」

ああ、やっぱりリリアンってこんなこと言ってたんだなあ。悲しくもあり嬉しくもある。俺の予想大的中。

サレというのは俺の名前で、魔人族の皆が考えてくれた。姓は彼らと同じサターナ。彼らは皆同じ姓をつけている。

「火を通せばいいのに」  
「こつちのがおいしい」

変わった趣向の持ち主だ。

ベッドから飛び降りて、部屋に設置されている姿鏡を見る。

アルフレッドの言うとおり、俺の姿は彼らと酷似していた。真っ白なアルビノ肌。血のように真っ赤な瞳と、夜よりも深い黒紫の髪。あ、今ちょっと詩的な表現だったな。気取るのも悪くない。こんな超俗的な容姿で気取れば、それも形になりそうだ。

自分で言うのもなんだが、顔付きに関しては魔人族特有の中性的な美貌であると言える。果たして世間一般でこれが美貌と呼べるのかは知らないが、ひとまず満足しておこう。あれだけ死んだんだ、これぐらいの御褒美は欲しいよね。

「ちょっとアルフレッドの所に行ってくるよ、リリアン」  
「ん、行ってらっしゃい」

生肉を頬張るリリアンに一言声を掛け、俺は部屋の扉の取っ手に手を掛けた。

言語を覚えた所で、アルフレッドから話があるらしい。

彼の部屋はこの広大な城の上層部にある。階段を昇るのが辛いけど、

「ここは訓練だと思って頑張ろう。」

俺がアルフレッドの部屋に何とか到達し、その扉を開けると、中でアルフレッドが本を読んでいた。こちらに気付いて優しげな笑みを見せてくる。

「やあ、サレ。もうここまでちゃんと歩けるようになったね」

「まだ辛いけどね」

「ははは、すごい成長速度だよ。さあ、座ってくれ」

壁一面に長大な本棚が敷き詰められている部屋。その一角にある円卓を指さして、アルフレッドが言った。

「さて、何から話したものかな……」

「俺から訊ねても良い？ その方が連鎖的に話が繋がりそうだし」

「そうだね、そうしよう」

「じゃあまず最初に」

俺は頭の中に所狭しと蓄積させていた疑問を口にしていった。

「ここはどこ？」

イーノ・サターナイルドゥーエ

「魔人族の国。今は国というより集落だけだね」

「集落？」

「魔人族の数がある時を境に激減してしまったんだ。昔はもったたくさんの家族がいた。今はこの城にいる百名程がイルドゥーエの民だ。国と呼ぶには至らないかもしれない。主権もないしね。この城

サンクトウス城はイルドゥーエがまだ名立たる国だったころの名残で、魔人族はここに居住している」

「激滅した理由は？」

「人間に攻め入られて殺されたんだ」

心臓が浮き上がる様な感覚を、俺は感じていた。

疑問ばかりが浮かぶ。

「なんで攻め入られたの……？」

「彼らが魔族を恐れていたからだよ。ずっと昔からね。妬みもあった。僕達はこの世界に存在する様々な種族の中でも、特に強大な『暴力』を持っていたから。僕達魔族は太古から人間と争いさかいを起こしていたけど、ある時に平和の道を取った。でも、それが裏切られる形で少し前に大規模侵攻を受けたんだ。僕達は争うつもりはないんだけどね。静かに暮らしたいという願いも叶わなかったよ」

「魔族の生き残りは……」

「今この城にいるだけだよ」

話を聞いて、俺の心の奥底にふつつつと燃えるような感情が生まれていた。

「怒ってくれるのかい？ 嬉しいね、やっぱり君は僕達の家族だ」

アルフレッドが見透かしたように言った。その表情が悲しげだった。

「でも、こんなことを言えば御先祖様たちに怒られてしまいそうだけど、人間達の言い分も解るんだ。僕達は傍から見ればいつ暴発するかも解らない危険物だからね」

彼は優しすぎる程に 優しくかった。軽く笑い声を漏らすアルフレッドの顔が俺の目に焼きつく。

「今は魔人族の数も減って、人間達もあまり手を出してこなくなつた。僕達は長命だけど、繁殖力がほとんどないから減らしてしまえばなかなか増える事は無い。だから安心したんじゃないかな」

「アルフレッドはそれで良いの？」

「良い、とは？」

「復讐とか、家族の仇とか、思ったりしない？」

「もう僕達にそんな力はないし……いいんだ。誰も争いを望んではないから。だからサレも気にしなくていいんだよ」

そうはいつでも、アルフレッドの語る物語を鵜呑みにはできなかつた。

同時に、生への執着が希薄に見えた事が、俺の心に引つかかった。理不尽な死を何度も経験したからこそ思うところがある。もっと生に執着すべきだ、と。

「暗い話はこの辺にしておこう」

アルフレッドはパチンと一度拍手をして、話を切った。

「今の所、僕達はサレの成長を見ることに生きがいみたいなものを感じている。君を見ているのはとても楽しい。赤子を育てるといのは僕達も初めてで、昔の文献を読んだりしながらの不格好具合だけだ」

「ありがとう。皆には感謝してるんだ。家族として迎えてくれたことと、まだ一カ月だけど、育ててくれたことも」

「はは、そう言ってもらえると僕達も嬉しいな。大丈夫、僕達はサレが一人でも生きていけるまで、君を守るから」

やめてくれ。死亡フラグみたいじゃないか。

壊れた記憶の端っこに残る言葉を使って、俺は内心で呟いた。

「そこで、早いかもしれないけど君に魔族の力の使い方を教えよう。さつきも話した通り、僕達は人間の目の敵にされることが多いから、自分の身を守るだけの力があつたほうがいい」

アルフレッドがそう言いながら立ち上がった。どうやら場所を変えららしい。

俺はおぼつかない無い足取りでアルフレッドの後ろをついていった。

連れられたのはサントウス城の地下だった。

アルフレッドの本棚だらけの部屋をさらに巨大にしたような大広間があつた。

いつのまにかリリアンを含む他の魔族がそこにいて、好奇の目で俺を待っていた。

皆暇そうだなあ……

「皆仕事をほつたらかして……」

アルフレッドも俺と同じように苦笑しながら頭を掻いている。

「皆、サレのこと気になってる」

リリアンが他の魔族の言葉を代弁していた。

「しよりの無い家族達だ。まあ、気持ちは解るから今日だけだよ」

アルフレッドが告げると、他の魔人達から「はい」と表面上だけ誠実そうな言葉が返ってくる。

「さて、今日教えるのは、魔人族特有の力についてだ。他の力の使い方は魔人族じゃなくても教えられるけど、これだけは僕達しか教えてあげられない。だから、真っ先にこの力の使い方を教えよう」

ふとアルフレッドが屈んで顔をこちらに向けてくる。

「他の種族にはない特異な力だよ。人間に恐れられる最たる要因の一つでもある」

随分と前置きが長いが、それだけ重要な力なのだろう。体力が少ないためか、少しだけ身体がだるくなってきたけれども、アルフレッドがいつにもまして真面目な顔で言うくらいだから　と気を引き締めることにした。

一度大きく息を吸って、深呼吸をする。

「よし、大丈夫。教えて、アルフレッド」

俺の言葉にアルフレッドが大きく頷いた。

すると　アルフレッドが自分の眼元を手で覆い、少したってから手をどけてこちらを見た。

何をしたのか。

その変化はすぐに把握できた。

アルフレッドの真っ赤な瞳の中に、複雑な魔方陣が浮き上がっていた。知らない文字が描かれているが、その主体となっているのは

六芒星の象形。



正直に心境を吐露すれば、不気味だった。  
血の様な瞳だけがやけに輝いていて。

「『破壊する魔眼』という」  
グラム・イストーラ

周りを見れば、他の魔人族も全く同じ魔方陣をその真つ赤な瞳に宿していた。勿論、あのリリアンも。心臓が止まるかと思う程の壮观だった。

「説明が飛ぶけど、この世界には『魔術』という神秘の力がある。意志によって事象を起こす力だ。でも、この破壊する魔眼はそれとは全く別の力だ。事象を起こす、という点に関しては同じだけど、性質は異なる。魔法は大抵何かを『生み出す』ことで現象と為す。でも、この魔眼は『何も生み出さない』」

なんとなくアルフレッドの言わんとする事が解った。

「この魔眼は全てを壊す。見れば理解出来ると思う」  
グラム・イストーラ

半ば茫然としている中、アルフレッドが視線を逸らし、小さく言葉を発していた。

「砕ける」

短く儂い言葉だった。

次に、耳をつんざく破裂音が俺の背後で鳴った。

振り向けば、アルフレッドは視線を向けていた大広間の床の一角が大きく抉れていた。大理石できていると小話に聞いていたその床は粉々に炸裂し、丁度数メートル半径の球状にぼつかりと穴が空いていた。

いやいやいや、ちょっと、やり過ぎじゃありません？

少なくとも、俺の中に残っている記憶にはこんな超常現象の映像はない。未知の力に好奇心を覚える最中、少しだけ恐怖も抱いていた。アルフレッドが言うように、その力が仮に俺にもあるとしても、もしそれが勝手に発動したら？

背筋に悪寒が走った。

「焦点を合わせるだけで良い。あとは俗に言う『悪意』や『害意』を込めれば　　こつなる」

えぐれた床面を手でなぞりながらアルフレッドが言う。

「勿論、この魔眼グラム・イストラにはリスクもあるよ。簡単に言えば、物凄く疲れ  
る」

それだけ？　え？　それだけ？　もつとこつ、失明するとかそういうやばめのリスクは？

「失明するとか、実質的なリスクはない。二次的なリスクはあるけどね」

あ、ないんだ。

「二次的？」

「そう。魔族が恐れられる最たる理由がこの魔眼にあると言っただろう？　だから、魔族を知る敵対者は大抵真つ先にこの眼を潰しに来る」

生々しい話になってきた。人間と争ってきたのだから当然なのかな。確かにイストーラの効率的な使い道として真つ先に思いつくのは兵器としての活用だし。まだ『争い』という単語にいまいちピンと来ないけど。

実は結構ガクブルしてます。

「だから、もしサレが人間の領分に身を置く時は、極力この力を使つてはいけないよ」

そりゃそうだ。バレたら死に直結しかねない。

それにしても、魔人を目の敵にしている人間の領分に身を置く事なんてあるのか。あんまり考えたくない。また死ぬのは嫌だし。悪意をぶつけられるのだって楽なもんじゃない。随分と慣れたのは確かだけど。慣れて良かったと思えるものでもない。

「今日はこのくらいにしておこうか。よくよく思えば、まだサレはほとんど赤子だからね。どうしてもこれだけは知っておいて欲しかった。魔人族として」

うん、俺も早めに教えてもらえてよかった。あとあとになって得体の知れないとんでも能力が暴走しました、とかじゃ笑い話にもならないからな。

俺は魔人族であるという自覚を強くして、アルフレッドの言葉に大きく頷いて見せた。

俺はこの世界について知らない事が多すぎる。今になって、新たな生を受けたことに気付いたような気がして  
嬉しくもあり、寂しくもなつた。

第二の人生？ まさか。数えてないけど第百の人生くらいなのは間違いない。それに、最初の人生について明確に覚えているわけでもない。

これは俺の新しい人生。過去に縋りつくのはやめた。どうせなら、前を見よう。

その方がオモシロイ。

芽生えた希望を胸にして、俺は身体を襲う倦怠感に身を任せた。

2話 「魔眼」(後書き)

中二街道まっしぐら！

### 3話 「独善」

前言を撤回しよう。月日が流れるのは早かった。

アルフレッドが妙な死亡フラグ的発言をしてからなかなか安らぐ事の無かった心持だが、そんな不安をよそに時間は淡々と進み、十五年が過ぎた。

十五年。十五年だよ!?

俺の成長日記(著アルフレッド)をこそそと盗み見ながらどういった具合でここまで来たか振り返ろう。うわっ、アルフレッドって意外と字きたねえ。几帳面そうなのに……

子育て一年目。

俺、一歳。

『サレに尻尾が生えた』

……な、なんだってー!

ぐっすりと寝て、起きたら生えてたんだ。これ何言ってるか解らないと思うけどマジなんだ。さすがのアルフレッドもかなりビビってた。

真っ黒な毛が生えた尻尾。

細長いけど結構ふさふさしてる。尾の末端の毛は長くて、若干丸身を帯びてるように見える。ふさふさ、ぼふあ、って感じ。擬態語ばんざーい。長さを測ったら1.5メートルもあった。おかげでリーチには困らない上に、ぼふあってなってる先端以外は細いから器用なことできたりする。

生えた当時はいきなり重心が変わったせいか、結構な頻度で転んでたなあ。

触り心地が抜群らしく、今でもリリアンの玩具にされてる。撫でられるとかなりくすぐったいのでやめてほしいです。

『サレの尻尾はよく感情を表現している。喜んでる時や楽しい時は盛大に尻尾が振られていて、解りやすい。僕も触りたいなあ』

アルフレッドさん、真顔で実はそんなこと考えてたんですね。と  
いうかそんなに振ってるつもりないんだけど。……どんなに隠しても尻尾のせいで内心がバレるのはいただけない。

最近、リリアンといるときは玩具にされると面倒だからよく腰に巻いて服の中に隠すようになりました。外に出しておくとおくと手を使わずに物を持ち上げたり取ったり出来るから便利なんだけどね。

『古代魔人族には尾が生えていたというが、先祖返りでもしたのだろうか』

へー、昔の魔人族って尻尾生えてたんだ。初耳。

子育て二年目。

俺、二歳。

『サレの破壊する魔眼グラム・イストラが発現した』

忘れもしない。俺が運び込まれた部屋が俺の部屋になったんだが、二歳にして部屋を全壊させた。不良少年ならぬ不良幼年！

ぶっちゃけると自分の魔眼がかなり怖くなったのでリリアンに縋りついて一日中泣いた。その頃にはリリアンは姉のような存在として俺の中で認知されていたといえよう。相変わらず生肉食ってるけ

ど。

なんだろう。あの包容力は魔性だと思ってる。

子育て五年目。

俺、五歳。

『グラム・イストラ魔眼をおおよそ使いこなせるようになったみたいだ。五歳というが、もう随分と動き回れるらしい。サンクトウス城の窓ガラスはサレが割る為にあるのだと最近思うようになった』

その節は申し訳ありませんでした。反省しています。動きたい盛りだったのです。

子育て八年目。

俺、八歳。

『魔人族の男性陣でこの頃サレに稽古をつけるようになった。皆サレが可愛いらしい。奪い合いが激しいが、今は大目に見よう。防衛力をつけるには絶好の機会とも言える』

俺の可愛さに骨抜きにされたらしい。……嘘だ！　じゃなきゃあんな厳しい稽古しないだろ！

かれこれ随分と死を経験してきたが、魔人族の男性陣に稽古をつけられるたびに「また俺死ぬのかな……」とか思ってたんだぞ！  
肋骨三本骨折、右腕尺骨骨折、左鎖骨骨折、半月板パリーンした時はさすがの男性陣も女性陣に物凄く叱られてた。

アルフレッドを見てると忘れそうになるけど、魔人族の男って結構豪気な奴が多い。極端。アルフレッドみたいな紳士風のやつと、どこの酒場の豪快親父だよ、みたいなやつに分かれる。でも実は前者の方が稽古は厳しかったりする。顔は笑ってるけど目が笑ってな



かった。

『めきめきと成長するサレを見てみると、自分の技術を全部習得させてみたいという欲求に駆られた。ちょっとやり過ぎたかな……』

ほらみる！ アルフレッドの稽古もかなり辛かったんだぞ！ ちなみに半月板パリーンはアルフレッドの仕業です。

子育て十年目。

俺、十歳。

『リリアンは相変わらずサレにべったりだ。僕が愛用している子育て白書によるとそろそろサレも近い者に対する反抗期に入る頃。窮屈じゃないだろうか』

もう慣れた。美人だし、悪い気はしない。けどサンクトウス城の大浴場にまでついてこられるのは困る。もう少し女であることを気にして欲しいです。ただでさえ老いを知らないぴっちぴちな身体なんですから年頃の僕を気遣ってください。

……あえて言おう、素晴らしいボディであったと。他意はない。

子育て十二年目。

俺、十二歳。

『サレの身体もおよそ完成に近づいてきた。身長も伸び、体つきもなかなか。鍛えた甲斐があったというものだ。僕にとっては余りに昔のことで記憶も微かにしかないが、大体この辺りから身体の成長は止まるはずだ。こればかりは子育て白書も通用しない。身体の完成と同時に、魔族の身体は当分の間その若さを保ったままになる』

御蔭さまで十二歳の頃から全く身体は歳を取りません。アルフレッドの話だと、人間族の年齢に換算して二十歳くらいらしい。魔族の成長は早い、完成と同時に止まる。いつてしまえば、全盛期を保ち続ける。便利な身体だけど、老いを知らないっていうのは別の苦悩の種にもなりそう。ちなみにアルフレッドはあれで二百歳を優に超えているらしい。大抵魔族は途中で自分の歳を数えるのが面倒になるっていった。せめて百歳まで覚えていようと心に誓った。

ちなみに精神の方は昔から変わらずそこはかとなく強靱だと自負している。俺には開き直るといふ最終手段があるのだよ。

伊達に何回も死んでないぜ……

子育て十四年目。

俺、十四歳。

『二年前から女性陣に魔術の手ほどきを受け、大方物にしたといつても良い。もう一人でも自分の身は守れるだろう。サレを拾ってからここまで、随分時が進むのが早かった気がする。僕達は一族の数が激減してから目的を見失っていた。そんな中、サレは僕達の心を驚掴みにした。彼は僕達の光で在り続けるだろう』

ちよつとこそばゆいです。

魔術に関してはすごく楽しかった。魔族が様々な力の権化であることも幸いして、魔術発動のための体内魔力には不便がなかった。とことんハイスペックだと思います。魔力を供給する体内器官である『魔核』が他の種族と比べても非常に優秀なおかげで、魔力の量も回復力も凄まじい。この身体マジパネエ。

魔術の使用方法は、魔力を燃料として意志の力を具現させるといふ簡単な形態。感覚的であることは否めないけど、過程はただそれ

ただだ。その意志の力が効果に強い影響を与えるけど、とにかく術式を発動するまでの障害が少ない。速度は重要だと思う。

ちなみに『魔核』は心臓に付属する形で左胸に存在してるっぽい。……というか、前提として『魔術』は『魔核』を持つ者特有の術式形態だ。魔力器官を持たない者たち 数の多さという観点から『人間族』を例に挙げれば、彼らは『魔術』を使えない。その代わり、別の術式形態で神秘の力を発揮する。たとえば『精霊術』とか。

速度という点については魔術が一步抜きんでているが、その他の神秘の力の術式形態にも長所はあるらしい。人間と敵対していることを考慮すると知っておいた方が良くかもしれない。

でも魔族しか住んでいないこのイルドゥーエにいる限りは、あんまり明確な情報は入ってこなかったりする。アルフレッドはその昔人間領に住んできたことがあるっていつてたけど、術式方面のことはそこまで詳しくないとのこと。ちなみにアルフレッドが俺の知っている言葉を話せたのは人間領に潜伏していたから。逆算すると、俺の記憶は人間族の言語を最初から習得していたってことだよな。

自分のことなのに解らないことが多いです。まあ、便利だからとりあえず納得しよう。理由はあとで調べればいいと思う。

そして今は十五歳。

俺の成長日記帳（著アルフレッド）を元の場所にしまって、俺はサントウス城の外に出た。

この集落イルドゥーエの領地はサントウス城以外は森に覆われていて、いかにも世俗から隔離されているという印象を抱かせる。

最近はこの森の中を散歩するのがささやかな趣味だ。ずっと城の

中つても窮屈だからさ。良い気分転換になる。

アルフレッドたちも快く許可してくれるのが現状だ。リリアンたち女性陣はいつも心配そうに引きとめてくるけど。

「髪、伸びたなあ」

前髪は目に掛かっていて、ふとそんなことを思った。俺の髪型はおおよそ女性陣の好みだ。横髪は長くて、肩に掛かりそうな勢い。後頭部の髪は長くない。襟足長い好きじゃないし、全力で女性陣に反抗してなんとか切ることを許された。でも、耳を覆い隠している横髪は切ろうと思ったたら今度は女性陣に全力で止められた。

くそつ、あの時は『権利の等価交換』とかリリアンに言われて納得しちゃったけど元から俺の髪は俺の物だよおお！ なんてあたかもそつちに俺の髪型の権利があるような言い方をしたのか。彼女達は策士である。

前髪もいざというとき魔族特有の赤目を隠せるように、とアルフレッドたちまで加わって切れずにいる。どことなく女っぽいかもしれないけど、まあ、顔が顔だしそこまで不自然ではないだろう。たぶんだけど。

左腰に剣、腰の背中側に採集用の小型ナイフを佩いて、尻尾を盛大に振りながら森を闊歩する。

散歩するついでに食料調達って寸法だった。

イルドゥーエ領内のこの森は動植物の宝庫。

何よりここまで育ててもらったからには少しでも恩返しをしたい。鬱蒼とした森だけど、城に籠っているよりは解放的な気分になる。鼻歌でも歌いたい気分だ。十八番はもとより、レパートリーが皆無なんだけどね……

そんな事を考えていると

「獲物はっけーん！」

白い体毛の犬ところ。……犬？ まあいいや。体長は3メートルくらい。俺が1.7メートルちよいだからおよそ二倍。そりゃあでけえよ。二倍だよ二倍。前足とか俺の腕三本分くらい。さすがに殴られたら痛そうだ。

森を散歩するようになったのは近頃の話だから、見た事のない動物がいて楽しいなあ。

「あ、気付かれた」

大声を上げたのがまずかったです。

向かってくるかなあ、とか思ってたなら、犬ところは俺を見るや否や一回だけビクリと身体を震わせて、次の瞬間には猛烈な速度で逃げ出していました。

くそっ！ 逃げるな食料！ 野生動物の意地を見せるよ！

咄嗟に近場の大木の枝を掴んで、逆上がりっぽく勢いをつけて枝の上に立つ。見える見える。

そのまま他の大木に飛び移りながら、徐々に犬ところとの距離を詰めた。

グラム・イストラ  
魔眼を使えば目視できる時点で決着がつくけど、頼るのは良くないと思う。リスクがまったく無い訳じゃないし。癖になると後々面倒だ。切り札は隠し通すべし。

「脳天直撃剣！」

我ながら酷いネーミングセンスである。ちょっと遠いけど思いつ

きり跳躍すればなんとか追いつけそうだったので、大きく大木の枝を蹴ってそのまま犬っころの背中にダイブ。空中で左腰の両刃剣を抜いて、着地と同時に真上から両手で剣を脳天に突き刺した。

「ゲルル ……」

こと切れるのは早かった。あつけないと言えばその通り。どしん、と音を立てながら倒れる犬っころの背中から飛び下りた。

「ごめんね、食べさせてもらっよ」

生きるためには食べなければならぬ。経験上、生死に敏感だからこそ、生き物を殺し、食べることに忌避感はなかった。死生観については五十回目あたりの死亡時までなんとなく考えてはいたけど、結局はつきりした答えは出せていない。いいんだ、それでも悟ったから。

俺は！俺が良ければそれでいいと思っているのだよ！

偽善的と馬鹿にされようが、独善的と罵られようが一向に構わん。フハハ。

とりあえず血抜きだけ済ませ、今度はナイフを抜いて犬っころを解体していった。さすがに全部はもっていきねえわ。残りは他の動物が喰いに来るだろう。

「……………ん？」

肉を巧い事切り取っていると、なんとなく嫌な視線を感じた。見られている、という漠然とした感覚。

その感覚が事実だと物語るように、次の瞬間には異変が俺を襲っ

ていた。

「おっと」

背後から何かが投擲されたのを確信する。明らかに一瞬殺気を感じた。振り向き、自分の背後へ投擲されたものを目視する。一本の投擲短剣だった。投げナイフ。

イストーラを使うまでもない。俺は尻尾でそのナイフの柄を巻き込むようにキヤッチして、そのまま即座に飛んできた方向にリリースする。尻尾ふりふり。

がさつ、と繁みが揺れるが殺気の主は姿を見せなかった。

まあ、あの程度の使い手か動物なら放っておいても問題はないだろう。それより肉が新鮮なうちに持って帰るべきだ。

「一応アルフレッドに報告しておくか……」

そう呟きながら、俺はサンクトウス城への帰路についた。

### 3話 「独善」(後書き)

一気に3話も放出するあたりに作者の無謀な勢いを感じてください。  
フッフッフー、やっちやうぞー。



#### 4話 「崩壊」

十六歳になりました。

少しだけ変わったことがある。

アルフレッド達が率先して自らの訓練を開始していた。物騒な事でもあるのだろうか。

「はは、何、サレを見ていたらまた鍛えたくなってね」

若すぎだろ。

「最近森の方はどうだい？ 前にちよつと変な事があつたって言うていたけど」

「いや、あれからは何も。なんだったのかなあ」

「次会った時に確かめればいいさ」

「それもそうか」

年齢的には凄まじいまでの開きがあるものの、アルフレッドたちは兄のようだった。リリアン達が姉のようであるのと同じく。同時に、親のようでもあるんだけど。何分複雑だから深く考える必要はないだろう。大切な家族であることは確かだ。それだけあれば良い。

「んじゃ、俺はまた森に行ってくるから」

「解ったよ。気を付けてね」

踵を返す。

アルフレッドの言葉には尻尾を振ることで応えておいた。

俺、十八歳。元服しました。

大人の仲間入りをしたらしい。全くそんな感じはしないけど。だって周りの面々は誰も老いてないし……時が進んだって感じがしなくなってきた。

サレ・サターナという名前を付けられてから十八年も経ったのか。頭では解っているつもりなんだがどうも実感が湧かない。

元服の儀は盛大に執り行われた。盛大だっていつてもサンクトウス城一階の大広間に魔人族の皆が集まって騒いだけだけだ。

俺以上にアルフレッドたちのほうが楽しんでた気がする……

それにしても、少しサンクトウス城が窮屈になってきた。

城はもちろんのこと、イルドゥーエ領内の森も大体歩き切ったし。かといって、イルドゥーエ領内を出るのも少し気が引ける。

だが、そんな俺の心境を見透かしたようにアルフレッドが言った。

「サレ、そろそろイルドゥーエを出てみてはどうだい？ 君に僕らが教えられることはもう何もない。もっと見分を広めた方が、生きるのが楽しくなると思うよ」

アルフレッドたちには俺の記憶の断片を話したことがある。俺が生に執着していることも、それとなく知っているのだろう。

俺はベッドに寝転がりながらアルフレッドの言葉に答えた。

「でもさあ、人間って大抵魔人族を目の敵にしてるんだよね？」

「皆が皆というわけじゃない。魔人族が人間族と和平を結んでいた時には僕達を快く受け入れてくれる人たちもいたよ。そういう見識

の違いも、自分の眼で見た方が早い」

「それもそうか……」

まだ荷が重いと思ったなら帰ってくればいい。

「なら、行ってみるよ」

「決まりだね。実はもう旅用具は揃えてあるんだ。明日僕の部屋に受け取りに来ると良い」

「合点了解」

軽く了承の意を示して、寝がえりを打った。

次の日。

「おい……これが旅道具とかどんだけ豪華なんだよ……」

アルフレッドの部屋に訪れると、旅用具と称して様々なものを渡された。

「えーと、これが《宝剣ジユワイユーズ》。かなり昔だけど魔人族の王族が持ってたものだね。宝物庫にあった」

渡された剣は鞘に収まっている。ピシッと整った直線形の柄と鍔は黄金色に彩られていた。これ金だよな？ 絶対金で作られてるよね？

さらに目を引くのは刀身。輝石類で作られている。いかん、輝きが眩しすぎて目に悪いぞ。

「これ、刀身はなにで作られてんの？」

「エインシエント・クォーツ 永晶石と呼ばれる輝石だね。ダイヤモンドの希少版って言ったところかな。余程のことではなければ刃が欠けたりしないから安心して振るうといいよ」

アルフレッドがいう『余程のこと』の加減を今まで数々見せられてきた俺は、その刀身が欠ける事は一生ないんじゃないかなあ、なんて思わずにはいられなかった。

それにしても眩しい。ダイヤモンドと例えていたが、まさしく、そのしつこいまでの輝き方と、光が当たる角度で様々な色合いを見せる性質はダイヤモンドそのものだった。

「あと、オフシディアン 黒曜石で造られた狩猟短剣に、リリアンが三年かけて作った旅服一式。丈夫さは折り紙つきだよ。サレのために尻尾も出し入れしやすいようになってるしね」

オーダーメイドってやつか。

それにしても、微妙に金糸と銀糸が使われているように見えるのは気のせいだろうか。

「糸に輝石を混ぜ込んであるから余程の事じゃないと切れたりしないし」

合点了解。深く考えるのはやめよう。丈夫な服、丈夫な狩猟短剣、丈夫な剣。そのくらいに思っていた方が楽そうだ。

「あとは薬とか野宿セットとか細かい備品は全部革の袋に詰め込んでおいたから。それを持ってマントを羽織れば完成さ」

アルフレッドの眼が輝いている。早く着て、と目で訴えかけられ

ているようだ。

しょうがないからその場で渡された宝剣と狩猟短剣をそれぞれ左腰と背腰に佩き、旅服に着替え、荷物を背負った。なかなか動きやすい。どことなく優雅な雰囲気を漂わせている服だが、旅服としての機能も十分なようだ。ついさつき採寸したかのように、サイズはぴったり。おそらく魔族の皆が愛用している貴族風の服を原型に旅服としての機能を付け加えたのだろう。ひそやかに内装のベストの胸元に括りつけられている赤い輝石が綺麗だ。

そして最後に身体が膝もとまで隠れる大きな黒いマントを羽織る。マントを首元あたりでペンダントで固定し、アルフレッドに向き直った。

「いやあ、様になってるねえ。良かった良かった。そのペンダントは僕達皆からのプレゼント。僕達が魔族である所以、破壊する魔眼イラの刻印でもある六芒星の象形が刻まれたものだ。皮肉っぽいといえばその通りだけだね。僕達が確かに家族である証拠にもなる。ペンダントくらいならあんまり人目につかないし、ただの六芒星だから誰も特別な感情は抱かないと思う。安心するといい」

ペンダントの下地は光沢のある赤で彩られていて、その上に黒い線で六芒星が描かれていた。縁どりは金。

いや、これ目立つわ。これでもかと目立つわ……

でもまあ、六芒星が描いてあるだけじゃそこらへんのアクセサリと変わらないらしいから気にする必要もないか。

「さあ、準備は整った。気が変わらないうちに行きなさい、サレ」

アルフレッドが促してくる。

荷物の中身はあとで確認しよう。

「今の台詞、親っぱかったよ」  
「練習したからね」

少しさびしそうな表情でアルフレッドが返してくる。

「そっか。うん、行ってくるよ。 疲れたらまた戻ってくるか

ら」

「気にせずにお行き」

アルフレッドとの別れは思った以上に呆気なかった。

「サレ、気を付けてね」

サンクトウス城の正門まで歩を進めていたら、突然背後から声を掛けられた。

リリアンが小走りにこっちに走ってきて、俺の頬に真っ白な手を添えてくる。

「ありがとう、リリアン」

相変わらず表情の変化に乏しい顔だけど、寂しそうなのはなんとなくわかった。

「俺の家はここだし、また帰ってくるよ」

「……いつてらっしゃい」

少し詰まり気味に声を出しながら、リリアンが俺の背中を押した。

「行つてきます」

やっぱり呆気ないけど、こんなものなのかなあ。

なんか言葉じゃなくて、行動で表される死亡フラグみたいだけど

その時の俺はアルフレッドの死亡フラグ乱立に慣れていたせいか、その事について深く考えなかった。

「結構歩いたなあ」

イルドゥーエ領内の森で一度立ち止まって感慨深げに言ってみた。鬱蒼と生い茂った繁みの奥の方に見えるのはイルドゥーエ領内と領外の境界線を示す大樹。

あの大樹を跨げば、そこからは魔族の領分ではなくなる。本当ならもつとドキドキするものなのだろうけど、今更になってアルフレッドやリリアンとの別れの呆気なさが頭の中で引っかかっている。

自分でもいつここへ戻ってくるか解らないのだから、一旦戻って訳でも聞いておこうかなあ。でも戻るのも面倒だなあ……

結局、大樹までゆっくりと歩を進めた。大樹に背を預けるように座り込んで、境界線を越える前に思い残しがないか確認しよう。そんなことを思っていたら

いつかのどこかで感じた『ねっとりとした視線』を感じた。

不穏だ。

視線を気取られている時点でたいした敵対者でないことは明らかなのに。どうしても他の要素と連鎖して異様に不穏な気分させられる。

「……誰だよ」

一応訊ねてみた。

返答はない。あるわけないか。

「もやもやする……」

やっぱり一旦戻ろう。

そう思って俺は首をもたげてサンクトウス城の方角に視線を向けた。

視界のずっと奥の方で、赤い光とどす黒い煙が上がっていた。

煙……？

嫌な予感が増して行く。

俺はすぐに立ちあがって地面を蹴った。

まさか。こんな短時間のうちに何か起こるなんて有り得ない。誰かがたき火を燃やし過ぎたとか、きつとそんな下らないことに違いない。



やめるよ、悪い方に考えるのはやめる。

俺は独善的でいられれば、それで良いんだ。そうすれば開き直れるし、自分の事だからたとえ不幸が振り掛かっても納得できる。

でも

気付いた。

俺は……俺と近い者の不幸に対して耐性がない。

何度も死んだことで得たのはささやかな独善性と、生への執着心。

俺は良い。俺なら良いんだ。

思考が悪い方向へ循環し始める。

今までの、この十八年間の様々な出来事が繋がって行って、他愛のない日常の会話までもが記憶の引き出しから取り出されていった。

はは、大丈夫だ。アルフレッドはあんなに死亡フラグ立たせても死ななかつたし。

心のどこかではそう思っていないくて。

息を切らせてサンクトウス城の正門に辿りついた時

俺は自分の眼を疑った。  
火。煙。血。

倒れている家族。

「ははは、なんだよ、どうしたんだ？」

争った形跡だけが残っている。  
いつもみたいに少し森へ行っただけじゃないか。  
なんで今日なんだよ。

「はは……」

乾いた笑いが口から漏れるのを止められない。

家族達の眼は、一つ残らず繰り抜かれた。

真っ黒な双眸がこちらを見ている。そんな気がする。

「誰か生きていないのか！」

やめろ、言うな。自分から彼らが死んでいると認めているものじゃないか。

「サ……レ……」

今にも途切れそうな声がつついた。  
リリアンの声だ。俺が間違っ筈がない。

「どこ！？ リリアン！？」

周りを見渡せば、幾人もの魔族の死体が倒れている場所で、少しだけ動く彼女の姿があった。

両眼は皆と同じように繰り返し抜かれていて  
傍には微動だにしないアルフレッドの死体があった。

「戻って……きちゃった……の？」

「大丈夫だ！ 今助けるから！」

その慰めは偽善だ。

リリアンの顔は双眸から延々と流れ落ちる真っ赤な血に染まっ  
いて。

「サ……レ……『行って……らっしやい』」

ああ……

さっきと同じように俺の頬に触れた彼女の真っ白な手は、その言葉の後に

力なく地面に落ちた。

「あ……あ……」

リリアン、もう一度俺の頬に触れてよ。  
お願いだから、そんな優しい顔で死なないで

「うわあああああああああああああああ……！」

叫ぶ。

喉が枯れる。

もつとつでもよくなった。

もついい。  
解らない。  
もついい。  
解らない。  
こんな所

壊してしまおう。

「全部ッ……！！ 消えちまええええッ！！」

俺は視界に入る家族達の亡骸を見て、城を見て  
全部壊れてしまえば良いと、強く願った。  
眼が焼けるような感覚を得て  
視覚が途切れた。

……。

ちくしょう。

4話 「崩壊」(後書き)

超展開!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2571z/>

---

セルフ・ライト・イデオロギー 魔人転生記

2011年12月11日22時04分発行